

コミュニケーション能力育成のための一考察

— 聞く、話す活動を通して —

平野謙治

I. はじめに

新学習指導要領の外国語の目標に「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことが新たに加わり、現場では、コミュニケーション能力と態度の育成のためには、何をどのように指導したらよいのか模索中である。外国語でコミュニケーションを図ろうとする場合、まず、話そうとする話題がなければならない。いくら話す技能が備わっていても話題がなければコミュニケーションは成立しない。また逆に、話題があっても話す技能がなければ意志の疎通はできない。また、両方が備わっていたとしても、いざ外国人に話しかけられたときに、とっさに適切な応対ができるかどうか、これもそのような訓練をしないと難しいように思われる。従来の英語教育の反省として、言語材料のドリルだけに終わってしまい、実際の言語の使用にまで至らないと言うことが指摘されているが、ある場面において、本当に話したいことや聞きたいことを話したり、聞いたりする活動を取り入れ、その場その場で、適切に反応できる力を養うことが大切であると思う。このように、一口でコミュニケーションを図ると言っても、そのためにはさまざまな要因が関わっており、これらを指導の場で、どのように育成していくかが課題となってくる。コミュニケーション能力は「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」それぞれの領域で考えられるが、本稿では、聞くこと、話すことを中心としたコミュニケーション能力育成の方法を実践を基に考えていくことにする。

II. 指導の実際と考察

1. 指導のねらい

生徒達が英語学習に最も期待することは、周知の通り、英語が話せるようになることである。英語学習の目標は、もちろん話すことだけではないが、今日のような国際化社会の情勢では、新学習指導要領も打ち出しているように、「聞くこと」「話すこと」を中心としたコミュニケーション能力をつけていくことが大切である。そして、これまでのように書物等を通して外国の文化や技術を吸収するだけではなく、これからは国際語となっている英語を使って、外国の人々とコミュニケーションする場面がますます増えてきて、自分達の考えを伝えていく力が要求されていくと思う。このような英語教育の流れと今までの指導の反省の上になたって、次のようなねらいを常に頭において指導に当たることによって、生徒達のコミュニケーション能力を少しでも伸ばそうという実践を試みた。

☆自分の思ったことや言いたいことを英語で話すことができる。

☆相手の話す英語を正しく聞き取ることができる。

2. 指導の実際

自分の思ったことや言いたいことを英語で話すことができるためには、まず、語彙とか文型を知っていたり、文や文章を作ったりする英語力が必要である。即ちインプットがしてなければ、アウトプットもできないわけである。インプットの一つの方法として、私は教科書を徹底的に暗唱させている。本文を学習した後、全員が授業の中あるいは授業外の時間を使って暗唱しなければならない。基本文型やよく使う表現は、とにかく暗唱していくことが一番だと思う。そしてアウトプットの方法として次の二つを実践している。

☆スピーチ

☆Please ask me

次にこれら二つの活動について考察を加えていきたいと思う。

(1) スピーチ

本校では、10年以上も前からこのスピーチ活動を続けており、これまでの研究会でも公開してきた。最近では、スピーチ活動もかなり普及してきて、実践している学校も増えてきているのは喜ばしいことである。ここで重視してきたのは、準備してきたスピーチをただ発表して終わりではなく、その内容について質疑応答の場を設定したことである。もちろんスピーチを発表するだけでも発表者の話す力、聴衆者の聞く力を伸ばすことになるわけだが、それだけだと一方的な情報の伝達で終わってしまうことになる。生きた言葉のやりとりという点からすれば、聴衆者も巻き込んだ生徒同士のinteractionの場を設定してやるのが大切である。私の場合、次のような方法でスピーチを行っている。

- 授業の最初10～15分を使って、男女1名ずつ発表する。
- 発表後、その内容についてコメントや質問をする。
- 未習語は、あらかじめ黒板に書いておく。
- 各自に評価表を持たせ、友達のスピーチを評価したり、自分のコメントを記録したりする。

次に、具体的な授業の一場面を紹介する。

A子(2年生)のスピーチ

H4. 1. 10

Hello. How are you? I'm going to talk about 七草粥.

We have 七草粥 on January seventh. It begins in Heian era. Bさん、Did you eat 七草粥? (No, I didn't.) Cさん、Do you know 春の七草? (Yes, I do. Seri,...) That's right. Eating 七草粥 has two meaning. We can live long and get well. But I hear some of young people don't eat it now. I think it isn't delicious, but it is one of nice Japanese cultures. So I want to eat it next year, too. Thank you.

(New Words . . . Heian era, live long, get well)

A子: Do you have any comments?

P1: I don't like it. And I don't like おかゆ. Do you like 七草粥?

A子: So-so.

P2: I don't eat 七草粥. When did you eat it?

A子: On January seventh.

T : Have you ever eaten 七草粥, everyone? Yes. Raise your hand. (4 人手を挙げる)

P 3 : I can't make 七草粥. Can you make it?

A 子 : No, I can't.

P 4 : Did you eat much?

A 子 : No. I ate it a little.

P 5 : I knew 七草 for the first time. When did you know it?

A 子 : I knew it this year.

P 6 : Do you know another names of Suzuna and Suzushiro?

A 子 : No, I don't.

P 6 : Suzuna is kabu. Suzushiro is Daikon.

P 7 : I watch 食いしんぼう万歳. Do you watch it?

A 子 : Sometimes I do.

P 8 : Which do you like better, おせち or 七草粥?

A 子 : I like おせち.

P 4 : When I was three years old, I have it for the first time. When did you have for the first time?

A 子 : I ate it for the first time last year.

P 6 : Do you know 秋の七草?

A 子 : Yes, I do. They are Hagi, kuzu (原文のまま)

このようにして、対話が続くわけであるが、これらのコメントや質問は、すべて生徒たちの挙手による発表である。質問が出にくい時や教師がここは必要だと思う時以外は、できるだけ出ないようにし、生徒同士のInteractionを重視している。話の内容によっては、コメントが出にくかったり、そうでなかったりするが、A子の場合は、話題が時季にあった身近なものだったので、コメントもたくさん出たように思う。この対話を見て、まず言えることは、英語を使って、言葉本来の働き、すなわち情報の伝達を果たしているということである。P 2の「七草粥は食べない(食べたことがない)」という発言を受けて、Have you ever eaten 七草粥? という難しい表現ではあるが、その場にあった内容なので、敢えて出してみた。この時は簡単にこういう意味だと言う程度でよいと思う。この質問によって、七草粥を食べたことのある生徒はわずか4人ということがわかった。また、P 5のように春の七草を初めて知ったと言う発言もあり、驚きと喜びの様子がよくわかる。話は発展し、P 6はスピーチの内容と自分の知識とを結び付け、七草の別名を聞いている。スピーチを通して、他の生徒たちにも新しい知識の伝達

スピーチ評価表				
				氏名 _____
評価項目				
1. クラス全員に聞こえる音量があるか。				
2. 原稿を見ないで話しているか。				
3. 聞き手に理解してもらおうよう工夫しているか。				
友達の発表を上項目ごとに評価してみよう。				
A : とてもよい B : ふつう C : 努力不足				
月 日		スピーチ者		テーマ
1	2	3	総合評価	アドバイス
自分のQuestion or Comment				

が行われている。このように自分が本当に聞きたいことを聞き、言いたいことを言うことによって、生徒達の発表意欲も高まり、教師が生徒を理解し、また生徒が生徒同士を知ることにもつながっていく。

この活動を実施する場合、気をつけている点は、次の2点である。

☆難しいスピーチの時はスピーチの要点を教師が英語で話してやってサポートをし、また同時に聴衆者にコメントを考える時間を与えている。

☆板書された未習の単語は必ず2・3回全員で言ってみる。

このような実践を積み重ねていくと、スピーチ活動の次のようなメリットが浮かび上がってくる。2年生160名の生徒達のアンケートで多かった順に述べてみたい。(複数回答)

ア. 話題のおもしろさ (106名)

生徒達は毎時間、友達がどんな話題でスピーチするのか楽しみにしている。内容が生徒達にとって身近な歌やマンガであったり、またおせち料理の由来など為になるものなので興味を持って聞くことができる。

イ. 語彙の拡大 (98名)

新学習指導要領にも文型、文法事項及び語彙の学年の枠を外すことがうたわれ、この点現場では指導がしやすくなったと思う。生徒達が言いたいことを言おうとすると、教科書に出てくる語彙だけでは、どうしても表現できない。従って、自分達で辞書を使って調べ、それを暗唱し発表することになる。多少難しい単語でも自分で努力し調べた単語は定着が速いものである。また友達が使った未習の単語でも文字と口頭で提示しておくとの定着が違ってくる。春には、cherry blossoms、夏には、firework、秋にはchrysanthemum、冬には、New Year's greeting cards等、1年中時季にあった単語がたくさん出てきて楽しい。

ウ. 人前での話す活動 (40名)

人前でスピーチをするのは日本語でも難しいものであるが、英語でスピーチを重ねることによって、人前で英語を話すことに慣れてくる。生徒達の学校生活を考えてみても、人前でまとまった話をする機会はきわめて少ない。そういった意味でも自分の考えや言いたいことを積極的に他に伝えていく場を設定していくことが大切だと思う。

エ. コミュニケーション (35名)

言葉は本来コミュニケーションの手段である。言葉を通して、自分を理解してもらい、また他人を理解することができる。アンケートの中に、「友達が何を考え、何に興味を持っているかなど分かったり、話題を通していろいろな情報を入手できて良かった。」とあったのは、まさに英語をコミュニケーションの手段として利用した成果だと思う。

オ. リスニング

聞くことに関して、クラッシュンは「学習者が理解できる内容プラス1の内容をふんだんに聞かせることが大切だ」と述べている。この点、生徒達が作るスピーチはほぼ同じレベルの学習者が作っているので、リスニングの学習としては適当な内容であると思う。友達のスピーチを聞くことによって、リスニングの練習にもなり、「ヒアリングの力がつき、質問への応答などがうまくできるようになった。」と言う生徒が多くいた。話す内容が生徒達にとって興味のある

身近なものだけに、聞く方も楽しく聞けたようである。友達のいろいろな新しい表現や語彙を聞いて、自分も使ってみようと思つた生徒も多かった。

次にスピーチのマイナス面の感想を見てみると、次の3点に絞られる。

- ① 話題を見つけるのに苦労した。(78名)
- ② 覚えるのがたいへんだった。(55名)
- ③ 時々難しい表現があつて、聞き取るのが難しかった。(40名)

身の回りに話題はたくさん見つけれられると思うのだが、それに気づかない生徒が多い。本来スピーチは難しい活動であるので、能力に応じて内容や長さを考えていけばよいと思う。このような苦労を体験しながら聞く力、話す力が伸びていくのではないだろうか。

参考までに、スピーチで良く使われた語、及び連語を挙げておく。(教科書以外)

- 語 clothes (服) stuffed doll (縫いぐるみ) sweets (お菓子) treasure (宝物)
tune (曲) dandelion (たんぽぽ) content (内容) flag (旗) novel (小説)
work (作品) musical instrument (楽器) future (未来) envy (うらやましい)
various (いろいろな) impudent (なまいきな) particularly (特に) anyway (とにかく)
- 連語 take part in (～に参加する) be looking forward to (～を楽しみにしている)
make an effort (努力する) be held (開かれる) get angry (怒る) first prize (1位)
hand in (提出する) be concerned about (～が心配だ) be moved (感動する)
be ashamed of (～が恥ずかしい) be disappointed (がっかりする)
take a walk (散歩する)

(2) Please ask me

従来の英語指導の反省点として、コミュニケーションという観点からみると、授業の中で、教師が質問し、生徒が答えるという一方通行で終わっていることが挙げられる。コミュニケーションはあくまでも聞き手と話し手の相互作用であつて、片方だけが情報を得て、満足しているだけではコミュニケーションが十分成立したとは言えない。教師が質問すると、どうしても教師主導型で生徒は受け身になってしまうので、これを逆にし、生徒に質問をさせてみた。この活動のねらいは、次の二つである。

ア. 生徒にイニシアティブを取らせ、主体的に学習に取り組ませる。

イ. 英語で質問できる力を育てる。

生徒にイニシアティブを取らせるということは、生徒が本当に聞きたいことを自分の言葉で主体的に発表し、生徒同士のInteractionを高めていくことである。また生徒達は英語でいろいろな情報を知りたがっている。英語で質問し、情報を得ることによって満足し、さらにそれが英語を話してみようという意欲へとつながっていくものと思われる。

授業の初め5分間はPlease ask meの時間である。生徒達は毎時間教師への質問を考えてこななければならない。その際、ただ質問を一つ言うのではなく、その質問に関連したことをつけ加えるようにさせている。例えば、

Q: I like tennis. I'm in the tennis club. But I'm not good at tennis.

Are you good at tennis ?

A : No, I'm not. But I'm good at table tennis.

松畑熙一氏は「英問英答はとかく、Do you like cats? No, I don't. で終わってしまいがちだが、答に少なくとも意味的につながる一文を加えるよう指導すべきである。」と述べている。このことは対話を発展させるためにも特に大切なことだと思う。従って、答える教師の方も必ず、それに関連したことをつけ加えることにしている。時には、教師の答がさらに発展して次のような対話になることもある。

Q : It is cold these days. We had snow a little. But today is cloudy.

Will it a white Christmas ?

A : No, it won't. We have little snow these days. Do you hope it will be a white Christmas ?

A : Yes, I do. (原文のまま)

生徒達はこの活動をととても積極的に取り組んだ。それは教師のことをもっと知りたい、英語で言ってみようという生徒達が本来持っている意欲を引き出すのに効果があったからだと思う。この活動の良さは、必要に応じて、教師の方で対話を広げていくことができるという点である。そして次の例のように教師がどきっとするような鋭い質問をする生徒もいる。

Q : I studied English yesterday. Did you study English yesterday ?

A : Yes, of course. I always listen to English tapes in my car.

私が授業の初めによくDid you study English yesterday? と聞くので、逆に聞いてみたかったのであろう。してやったりという生徒の表情が見られた。

「Please ask me」がある程度定着した頃、次にその発展した活動として、「Please ask your friends」を実践してみた。初めの段階では、質問事項を紙に書いてこさせ、これを基に発表させた。これによって、質問する対象は教師だけでなく、身近な友達にも向けられ、さらに大きく広がっていくことになった。ここでもただ単にYes, Noで答えるだけでなく、何か自分の意見をつけ加えるように指導した。次に、実際の例を見ていきたい。

A : B君 is very handsome. Who is the most beautiful girl in my class ? B君!

B : This is one of the most difficult questions. (笑)

T : There are many many beautiful girls in this class.

クラスの人気者A君がB君にこのクラスで一番かわいい子は誰かと尋ねている。B君の答に笑いが起こったのは、暗唱したばかりの教科書の本文をうまく利用して言ったからである。このような場合、とかく黙ってしまっただけで対話が途切れることが多いものだが、B君の場合は、機転の利いた名回答であった。このように、聞かれて分からなければ、分からないと英語で言えばよいわけで、I don't know.とかI forget it.あるいはwellのようなつなぎの言葉は非常に大切な表現となってくる。

A : I went to Oki to meet my grandfather and grandmother this summer. Have you been to Oki ? B君!

B : Yes, I have. I think Oki is very beautiful.

have been toという表現は教科書では3年で習う構文だが、早い時期から一つの決まり文句として与えている。B君の答に注目したい。I thinkという表現を用いて、自分の考えをつけ加えている。この表現も早くからインプットしておいた成果が表れていると思う。これは英語でのやりとりにはよく使われる表現であり、自分の考えを伝える重要な表現でもある。授業の中ではDo you think ~?とともにしばしば出てくる。そして、Yes, I have.で終わることなく、I thinkを使って、自分が行ったときの感想をつけ加えている。

A: I enjoy studying English. It is different from Japanese in many ways. And the differences are very interesting. Are you enjoy studying English? B君!

B: Yes, I am. I like English ... the best ... of all subjects.

英語の好きなA君は教科書で習った表現を利用して自分の考えをうまく述べている。このように教科書で出てきた表現を実際の会話の中に利用させるためには、まず第一に教科書を徹底的に暗唱させることだと思う。暗唱しておれば、自然にその表現が口から出てくるものである。質問の部分は正しい英文になっていないが、尋ねたい内容はB君に伝わっている。B君の応答もゆっくりではあったが、自分の本当の気持ちを述べているところに価値がある。とっさに聞かれて、つけ加えの文を言うのは生徒にとって非常に難しいことであるが、「簡単なことでもいいから言ってみよう」と気長に指導している。自分の意見を言うためには多少時間がかかるが、その間生徒は一生懸命言いたいことを考えている。一見時間の無駄のように思えるが、この間こそが本当の意味のコミュニケーション能力を育てる力になっていくものと思う。

A: I will give many New Year's cards this year. It's beautiful. I like watching New Year's cards very much. How about you? Bさん!

B: I like watching New Year's cards. Please give me New Year's cards.

これは12月に行った授業で出てきたものであるが、Aさんは今年は年賀状をたくさん出すつもりだと、今自分にとって一番身近な話題を取り上げている。このように時期にあったさまざまな話題が出てきて、聞く方も興味を持って聞くことができる。そしてBさんは、一生懸命考えた末に、私にも年賀状をくださいという本心からの価値ある言葉を言っている。

参考までに、友達への質問の例を挙げておく。(原文のまま)

- I made a Christmas cake with my sister last year. But I will buy a Christmas cake this year. Will you make a Christmas cake this year?
- I'm concerned about report card. Because my test was bad. Are you concerned about it?
- He is handsome. He is a very good basketball player. He is our homeroom teacher. Who is he? Please guess.
- When I take a bath, I usually sing songs. I like singing songs and listening to music. Which do you like better, singing song or listening to music?
- I said to my mother, "I want Christmas present". My mother said, "You aren't child". I'm very sad. Do you want Christmas present?
- Easy question for you. Long years ago Mr. クラーク said "Boys be ambitious". Is this

a true or a false ?

- It's getting cold day by day. And I became a lazy girl. So I'm not good at get up early in the morning. What time did you get up this morning ?
- When I got up, it was raining. I saw a clock. It was six o'clock. I was very tired, and I closed my eyes. And I waked up! It was seven thirty! I was very busy after that. What time did you get up ?

III. まとめと今後の課題

以上、コミュニケーション能力を育てるための具体的な実践を紹介したが、これらの活動の基本にあるものは、生徒たちに英語を通して自分が本当に言いたいことを言わせ、そこでのさまざまな情報の授受を通して、英語を話したり、聞いたりする力を伸ばすことである。スピーチや「Please ask me」を実践してみて、生徒達はとても楽しいという感想を持った。それはまず知識が増える、そして生徒や友達のことが分かるというこの2点に代表されると思う。知的好奇心旺盛な中学生にとって、英語を通していろいろな知識や情報が得られることは興味深いことであろう。そして、英語を生きた言葉とするためには、ある情報が相手に伝わらなければいけないが、これらの活動はまさに伝達というコミュニケーション本来の働きを果たしていると思う。生徒は本来英語を話してみたいという欲求を持っているが、さまざまな要因でそれが阻害されている。例えば、安心してものが言えるというクラスの雰囲気がないと、なかなか英語を口に出すことはできないだろうし、あるいは基本的な文型、語彙等が定着していないと、英語で自分の考えを伝えることは難しいだろう。これらの要因を一つずつ克服していったら初めてコミュニケーション能力が育ってくると思う。

今後の課題としては、スピーチ後の質疑応答にできるだけたくさんの生徒が参加し、生徒同士のInteractionをもっと活発にしていくための工夫や評価等の問題が考えられる。また、「Please ask your friends」で出された質問がさらに広がって、生徒同士で質疑応答ができるようにするためにはどのような工夫が必要か、これらの課題を解決するためにさらに実践を重ねていきたいと思う。

参考文献

- 「新しい英語科授業の創造」 斎藤栄二他 桐原書店 1986
- 「英語授業を魅力的に」 松畑熙一・高塚成信 大修館書店 1989
- 「学ぶ力を育てる学習」 島根大学教育学部附属中学校 1986
- 「自ら学ぶ力を育てる学習指導」 島根大学教育学部附属中学校著 東洋館出版社 1988